

ラフバラ大学訪問で経験したこと

My Experience of Visiting Loughborough University

原田和弘

Kazuhiro Harada

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

スポーツ科学研究, 7, 72-73, 2010年, 受付日:2010年7月14日, 受理日:2010年7月14日

今回の交流事業の主要なイベントの1つは、ラフバラ大学での研究室訪問であった。大学院生から、それぞれの研究室での内容についての紹介を受けた。研究室訪問に際し、当初は、「私の専門である“身体活動による健康づくりの推進”を取り扱う研究室を訪問できれば」「また、あわよくば、今後の共同研究やポスドク留学等のきっかけがつかめれば」という希望を持って参加した。けれども、残念ながら該当研究室は不在で、訪問先は運動生理学やバイオメカニクスが中心であり、当初の希望を叶えることはできなかった。ただし、これらの研究室を訪問する上で、有意義な経験をする事ができた。その第一は、研究の国際交流には、話す内容が重要であることを実感した点である。他の早稲田のメンバーを見ていると、言葉が多少わからなくても、同じ研究テーマを持つ者同士でディスカッションが盛り上がっている状況があったようである。また、研究発表会の後、食堂にわざわざ質問をしに来た大学院生もいた。そのような様子を見て、国際交流をする上で、内容が伴っているのであれば、多少の英会話のスキルは問題にならないという印象を持った。また第二に、様々な研究室訪問を通じて、スポーツ科学の専門家として幅広い知識を身につける必要性を痛感した。恥ずかしながら、説明を受けても訪問した各研究室の内容をほとんど理解することができず、リスニング能力は無論、自身の知識の圧倒的な

不足に気づかされた。思えば然りで、これまでの早稲田大学内での研究発表会でも、日本語での発表で何となくわかったつもりになっていただけであり、英語というフィルターを通すことで、このことがより鮮明になったのではないかと考えている。

主要なイベントの2つ目は、ラフバラ大学との合同研究発表会であった。早稲田大学から4名、ラフバラ大学から4名の大学院生がそれぞれ発表(口演15分、質疑応答5分)を行った。私は、これまで行ってきた一連の研究の概要について発表した。これまで数回、英語で発表する機会があり、その経験で、英語での発表も日本語での発表も、事前にしっかり練習すれば良い発表ができるという感触を得ていた。そのため、今回の発表は、落ち着いてメリハリのある発表ができたという手ごたえがあった。発表の経験を積むことで、英語での発表に対する抵抗が少しずつなくなっているように感じる。質疑応答も、質問者の英語が聞き取れず何度も聞き返したのは痛かったが、臆せず堂々と対応し、質問内容が把握できた段階では的確に回答することができたと思う。今回の研究発表会により、英語での発表に対する自信をつけることができた。しかし、他の人の研究発表内容については、上述の研究室訪問と同じ状況であり、ラフバラ大学の大学院生の発表はもちろん、早稲田大学のメンバーの発表もほとんど理解できなかった。リスニング力とともに、様々な分

野に知識を持っておくことの重要性を改めて感じた。

加えて、今回の国際交流事業により、1 週間にも満たない短い期間ではあるが、英語でのコミュニケーションの機会を持つことができたことも大きな収穫となった。「何とかなるだろう」と軽い気持ちで、特別な準備もせずに出国した。しかし、いざ生の英語を聞いてみると、予想をはるかに超えて聞きとることができず、強いショックを受けた。“brother”が聞き取れない、何度聞き返しても“where”と“when”の違いがわからないなど、基本的な英語も聞けない状況になることもあった。ただし、こちらが話すことは、どんなに拙い話し方であっても、ほぼ確実に伝わっていたようである。今回の経験で「英語を“聞く”ことは日頃のトレーニング、英語を“話す”ことは度胸が大切である」という教訓を得た。また、話す人によって英語の聞きとりやすさは顕著に差があった。以前から「〇〇人の英語はわかりづらい(わかりやすい)」といった話を聞いてはいたが、同じイギリス人でもここまで聞き取りやすさに差があるのかと驚かされた。ただし、中には、わかりやすい言葉を選んでゆっくり話してく

れる方もいて、とても有難かった。一方で我が身を振り返ると、私の研究室には留学生が複数名所属しているが、留学生に対する自分の言葉の配慮の足りなさに気づかされ、反省させられた。

なお、蛇足ではあるが、日本とイギリスとでは、大学文化も大いに異なることを今回の交流事業で体験できた。例えば、ラフバラ大学のキャンパス内では酒類が販売されているだけではなく、バーも複数設置されており、スケジュールの合間に、同行メンバー数人でバーでのひと時を満喫した。聞くところによると、他のイギリスの大学でも、概ね同様のようである。このイギリスの大学文化はとても素晴らしいものであり、日本にも是非根付いてほしいと強く感じたことを付記する。

末尾になりましたが、今回の事業を暖かくご支援下さいましたプログラムリーダーの彼末一之先生、教育推進部門長の中村好男先生、実施に向けご尽力下さいました研究院助教・次席研究員の宮下政司先生、ラフバラ大学の David Stead 先生を始め、お世話になりました皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



写真 研究発表会の様子